

## 「外交とユーモア」

日時: 2012 年 8 月 3 日(金)午後 6 時 30 分～8 時 45 分

場所: 港区生涯学習センター305 号室

今回の講師には、元外交官でエッセイストの大塚清一郎氏をお招きしました。大塚大使は 1966 年の入省から 41 年間に亘り外交官のキャリアを送られ、この間、初代エディンバラ総領事、ニューヨーク総領事(大使)、駐スリランカ大使、駐スウェーデン大使など、海外の7カ国において重要なポストを務めてこられました。

実は、大塚大使が港ユネスコ協会(MUA)の活動にご協力下さるのは2回目となります。昨秋、MUA が創立 30 周年記念特別事業のひとつとして、港区内で「歌と踊りで世界をめぐる」と題するステージ公演を開催した際、大学生のご子息と一緒にこれに出演して、すばらしい「父と子のバグパイプ演奏」をご披露くださったのです。

当日、大塚大使はまことに凛々しい、スコットランドの男性の民族衣装として知られるキルトにジャケット、シャツ、ネクタイを身につけて登場され、参加者全員の目が大使のキルト姿にクギ付けとなりました。大使は、「よくある質問」に答えるような形式で、スコットランドには 250 種類ものキルト用タータン模様があり、夫々が異なる部族(クランと称する)を象徴していること、また、かつて部族間の戦争でこの正装をしたうえで吹き鳴らされたバグパイプは、あたかも日本の戦国時代のホラ貝のように、敵を威圧し、自軍の兵士の士気を鼓舞する目的で用いられたことなど、次から次へと興味尽きないお話をして下さいました。



その後、予めご用意下さったレジメに添って、(1)宰相吉田茂のユーモア、(2)内戦下のスリランカでの日本の和平努力、(3)社会福祉先進国スウェーデンの「光と影」、(4)「修羅場のユーモア」を教えてくれたスコットランドの友人、の4テーマに関して、外交官としての実体験に基づく貴重なお話を伺い、また、どんなときにもユーモアのセンスを忘れない大使のお人柄に接することができました。大変、中味の濃い、素晴らしい講演でしたので、大塚大使のご了承を頂いて以下に、講演テキストを紹介させていただきますのでご覧ください。

.....

皆さん今日は。今日は港ユネスコ協会の講演会にお招きいただきまして有難うございます。大変嬉しく光栄に思っております。

ところで、今日の講師は、のっけから、ちょっと変てこりんなスカートはいて出てきたなと思っておられる方が多いことと思います。念のため申し上げますが、これ、スカートではありません。「キルト」と言いまして、スコットランドの民族衣装の正装です。後でバグパイプを吹かせて貰いますが、バグパイプを吹くには、やっぱりキルトでないと様になりません。私はかれこれ25年前、スコットランドの首都エディンバラの初代総領事として赴任致しまして、そこで仕事をしているうちにバグパイプの魅力に取りつかれまして、一週間に一度バグパイプの先生にレッスンを受けまして、そうこうしているうちに、このようなキルトを着てバグパイプを吹くようになりました。ご覧のように靴からはじめて、靴下、スポラン、キルト、ジャケット、シャツにネクタイ・・・となっております。一式を着るのに15分くらいはかかってしまいます。そこで今日は初めからキルトを着て参ったという次第でございます。

ということで如何でしょうか・・・私のキルト姿、結構似合っていると自画自賛していますが、如何でしょうか？「ところで、キルトの内側はスポンポンですか？」・・・そういうご質問がよくあります。昔はその通り「スポンポン」だったそうです。今では、ちゃんとパンツをはいています。

はっきり申し上げますが、初めて「キルト」を着ましたときは、正直に言いますと、股のあたりがスースーして、少々心もとない感じがありましたね。しかし、これが慣れてしまうと、何とも言えない着心地がよろしいのです。スカートをいつもはいておられるご婦人方がうらやましいですよ。ここに付けておきます小さなポシェットのようなものは、「スポラン」と言います。要するに小物入れですね。キルトが風でめくれ上がらないようにするための重しの役割もあります。中には小銭、名刺、ペンなどの小物を入れてあります。

## (イントロ)

今日は、「外交とユーモア」というテーマでお話しさせていただきます。

私は四十一年間、外交官という仕事をさせてもらいました。外交官と言いましても、正確には、外務公務員法という法律がありまして、「外務公務員」でありまして、略せば、「外公務」ということになります。生命保険の会社の「外交員」とよく似た仕事です。つまり、国民の皆さんの利益を総合したものが「国益」ということになりますが、その「国益」という名の保険を汗水たらして外国との関係で守るための外回りの外公務員です。かなりの安月給もいいとこです。昭和41年、入省しました時の私の初任給は19,600円です。今でも良く覚えています。当時外務省で流行っておりました「川柳」があります。『外務省 財布の中は皆無省』この川柳、実は私の駄作です。同期生の一人は、『外務省 お金はいつもナイジェリア、仕事ばかりアルジェリア』そうこうしている内に、彼は本当にナイジェリアに赴任になりました。これは本当の話です。

冗談はさておき、入省して間もなく、昭和41年入省組の同期生24人が、大磯の吉田茂総理邸に昼食に招かれたことがありました。このニュースを初めて聞いた時は、皆興奮しまして、「いや、これはすごい。ひょっとしたら、マッカーサー元帥とやりあった話なんか聞かせてくれるのかな」我々は大いに期待に胸を膨らませた次第です。86歳の吉田総理が大変上機嫌で、我々「外交官の卵」を迎えて下さいました。例の黒い羽織姿で、手にステッキ、縁なしの丸メガネ、そして例の太い葉巻です。本当に胸がわくわくしました。やがて、邸内で昼食会が始まり、始めのうちは我々も緊張してましたけども、だんだん口元がほだけて参りまして、自己紹介で同期生の一人の浜野君がこう言いました。

「総理、私はインドネシア語を勉強しております」

浜野君がそう言うと、総理は「そうかね。インドネシアには私の友人がいるよ、スカルノって名前だね」

スカルノ大統領のことです。とにかく話のスケールが大きいのですね。

「大分前だったけども、スカルノが日本に来ることになって、どうも対日賠償請求の話を持ち出すらしい。ワシは何て言ってやろうかと思って考えたんだが、こう言ってやった。(スカルノさん、よく日本にいらっしゃいました。心から歓迎致します。ところで、日本は、インドネシアのあたりから毎年やって来る台風のおかげで、いつも大きな被害をこうむっております。今、台風の被害総額を計算させております。近いうちに、その請求書をお返ししますから、ひとつ宜しく願います) スカルノは賠償の話は全然口にせずには帰って行ったよ」成る程、外交術としてのユーモアはこんなところに生かされるのか。私達は吉田さんのユーモアにいたく感動しました。そして、例のステッキについて、私たちを見送りに玄関まで出てこられました。そして、最後にポツリと言われた一言を、私は今でもよく覚えております。

「君達ね、『一宿一飯の恩義』という事を忘れちゃいけないよ。今日はワシが君達に昼ご飯を御馳走したんだ。今度はワシが君達を訪ねていく番だ。その時はひとつよろしく頼むよ」86歳の吉田総理の目が、いたずら好きの少年の目のように、キラキラ光っていたのを、私は今でもよく覚えております。その翌年の10月20日、吉田総理は87歳で亡くなりました。あの日からもう46年経っております。そういう次第で、私たち昭和41年入省の24人の同期生は、吉田総理に対する『一宿一飯の恩義』を返せないままで、ずっと今日に至っております。ですから私は、吉田総理から教わった「ユーモアの精神」を受け継ぎ、ユーモアで友達の輪を広げることによって、「一宿一飯の恩義」を返そうと、そんな気持ちでいるわけです。

ところで、「ユーモア」ということは、皆さんも身近な生活の中で、接しておられると思います。実践しておられる方も多いと思います。

数年前に、巷では「知的なフランス語講座」というのが流行りました。皆さん、覚えておられますか？最近では「知的なハングル講座」、更には「知的な中国語講座」もあるらしいですよ。

隣の韓国の言葉、「ありがとう」、これはみなさんご存知でしょう？ そうです、「カムサハムニダ」です。それでは「ハム・サンドイッチ」、これをハングルで何と言いますか？ご存知の方は？これは、ハングルでは「パンニ・ハム・ハサムニダ」。「切れ味のいいハサミ」、これはハングルでは「ヨング・チョンギレル・ハサミダ」。皆さん、ゴルフがお好きな方も多いでしょう。ゴルフのダブル・ボギー、これハングルで何と言いますか？答えは、「パー・プラス・ニダ」。最近では、中国語講座も流行り始めているようです。中国語で、数を数えると12345678は……となります。そこで、蚊、モスキートのことは中国語で何というのでしょうか？答えは「チー・スー」（血吸う）。発音は、「チー・スー」と尻上がりです。なかなか面白いですね、中国語講座も。これがミャンマーに行くと発音がひっくり返らしいです。「チー・スー」ではなく「スー・チー」だそうです。アウンサン・スー・チーさんの影響力も大したものです。

## (2)スリランカで取り組んだ「戦争と平和」の問題

そろそろ本題に入らせて頂きます。私は仕事柄あちこちの外国に勤務いたしました。全部で7つの国で仕事を致しました。順番に言いますとアメリカ(都合3回)、カナダ、フィリピン、イギリス、タイ、スリランカ、スウェーデンの7つの国です。スリランカで取り組んだ「戦争と平和の問題」が最も印象に残る仕事でした。

私は、20年以上も内戦が続くスリランカに大使として2000年8月に赴任しました。赴任した頃は、内戦が続き、自爆テロがコロンボの街で頻発しておりました。

ところでスリランカに行かれた事のある方、ちょっと手を挙げて頂けますか？おられませんね。私も実はスリランカには、当時初めて行ったのです。インドの南に万語のような形をした小さな島国、これがスリランカです。昔はセイロンと言っていましたね。

スリランカは、20数年も民族紛争が続いた国で、その原因は、シンハラ人の多数派とタミル人の少数派の対立です。多数派の「シンハラ人」は、仏教徒で人口の約7割、インドの北の方から来た人達です。少数派の「タミール人」は、ヒンズー教徒で、人口の約2割弱、インドの南の方から来た人達です。この民族紛争は、スリランカの内政上の最大の問題ですが、1970年代の半ば頃から、「タミール・イーラム解放の虎」…「LTTE」と言いますけども…彼らが独立を目指して武力闘争を開始しました。それからもう20数年内戦が続いた訳です。

北海道よりもちょっと小さい島国で、人口は、約二千万人です。「スリランカ」というのは、本当は「光輝く島」という意味なんですね。本来ならば、平和で豊かな美しい国であるべきところに、長い間、こういう紛争が続いてきた訳です。

「タミール・イーラム解放の虎」、LTTEのメンバーは、命を捨てて「自爆テロ」を敢行してきました。特に、女性のLTTEのメンバーによる自爆テロが多いのが特徴です。自爆テロ用のジャケットを、私は実際に見せてもらいました。上半身に着用するジャケットです。ジャケットの下に、まず帯状の爆薬がぐるりと貼り付けられています。その外側に、パチコン玉くらいの弾が六百発くらいびっしり貼り付けられています。そして、自爆装置のスイッチが二つ、右と左の脇の下あたりに夫々付いています。それを着て、テロリストはスリランカ政府の要人に近づいて行く訳です。できる限り近づいて、出来れば抱きついた後、スイッチを引いて自爆する。弾は無差別に、四方八方に百メートルくらいバァーと飛散しますので、周りの人は巻き添えで多数の死傷者が出ます。女性のクマラトunga大統領は、この自爆テロに遭遇し、右目を失明しています。

着任後一年少々経ちまして、幸いなことに停戦合意が成立しました。これは、ノルウェーがスリランカ政府に頼まれて、誠実かつ我慢強い「仲介役」を続けてきた努力が、政権が交代して新しいウイクラマシンハ政権になって実ったわけです。それで、「タミールの虎」と「政府側」と双方に働きかけて、ようやく2002年2月に停戦合意が成立しました。私は、「いよいよ日本の出番だ」と思った訳です。日本は、スリランカに対する最大の援助国です。スリランカが外国から受け取る援助…ODAですね…その約6割は、日本からの援助です。ですから、停戦が合意され、これから和平プロセスが進み、更に復興・開発が必要になってくる局面で、やはり最大の援助国である日本の役割がとて重要になるのは、当然のことです。

そして、私が考えた戦略は、ポイントが二つありました。一つは、やはり、紛争の現場を見る必要があるということでした。紛争の現場を自分の目で見て、自分の肌で感じて、「タミールの虎」のリーダーと膝付き合わせて話をしてこなければ、停戦が長続きする本物の停戦なのか、日本の経済協力使節団が来訪して危なくない状況なのか、そういった事もちゃんと調べなければならぬと思いました。それが、まず第一のポイントでした。第二のポイントは、日本が、その紛争地域、つまりLTTEの支配地

域で小さくとも意義のある援助プロジェクト、例えば生活飲料水を提供するための井戸掘りとか、そういう緊急援助の「とっかかり」をつけられないかということでした。そして、そのような援助を積み重ねることによってLTTEの支配地域の住民達が「内戦に逆戻りするのはいもう嫌だ」という状況を作り出していくと言う戦略でした。これは後でお話する「和平の定着イニシアティブ」に通じる考え方です。

そこで、本省、スリランカ政府、ノルウェー政府に予め根回しをして了解を得て、LTTEの本拠地に出かけることにしたので。私の会談相手は、LTTEの第二番目のリーダーで、タミルチェルバンという35歳の筋金入りの闘士です。私達は、コロomboから、私と厚生労働省から出向の井関さんという女性の一等書記官、タミール語の通訳、この三人で防弾車のランド・クルーザーで陸路出かけた訳です。ランクルは防弾車ですが、地雷を踏んだらひとたまりもありません。ですから安全面については注意を怠りませんでした。現場に行ってみると、あちこちにドクロマークの立て札が立ってしまっていて、要するに「地雷注意」ということです。未処理の地雷が全土で百万個以上残っているといわれていました。出かける際、玄関まで見送りに出た妻は、日頃はのんびりして物事には動かない人ですが、この時は、「気をつけてね。無事に帰って来てね」と流石に心配そうな顔でした。

キリノッチというLTTEの本拠地でタミルチェルバン氏と会って会談しました。怖い感じの人かと思ったら、非常に穏やかな35歳の青年で鼻の下にちよび髭を蓄えた人でした。チャーワーカッチェリという、大変な激戦地の出身の人でした。私はそのチャーワーカッチェリを視察したことがあります。政府軍の攻撃でメチャメチャに破壊され、ゴースト・タウンのような町になっていました。ところで、LTTEのリーダーは、ブラバーカランという人物で、明石代表と一緒に一度だけ面会したことがあります。怖い目つきの百戦錬磨の闘士という感じの人物で、空手が茶帯だと言っていました。「私はブラックベルトだ」と言ったらブラバカランは目を丸くしていました。私は、松濤館流の空手初段ですから、「貴方は何流の空手か？」と聞いたら、即答で「ショートーカン」と答えたのには率直に言ってびっくりしましたね。「インドにいた時タカシから教えて貰った」と言っていました。が、「タカシ」なのか「タカハシ」なのかは今でも分かりません。

それはさておき、タミルチェルバン氏と話をした時は、初対面ですから、始めにタミール語で「ワナッカム」と挨拶しました。「ワナッカム」とは「こんにちは」という意味です。シンハラ語では「アーユ・ポーワン」と挨拶します。「ワナッカム」で握手して座り、話を始めました。黒縁の眼鏡をかけて、鼻の下にちょっとちよび髭をたくわえて、大変にこやかな微笑が印象に残る人でした。色々話をしてみますと、やはり、タミール人が、今までシンハラ人を主としたスリランカ政府に如何に虐げられてきたかという歴史をいろいろと語っておりました。私は、頃合いを見計らって、和平プロセスの話を切り出しました。

「停戦合意も成立しました。交渉による紛争の平和的な解決を是非実現して頂きたい」

タミルチェルバン氏も「LTTEも交渉による紛争の平和的解決を真剣に望んでいる。武力の行使は望まない。分離独立国家以外の道、つまり自治権を強化する事による解決を模索していきたい」と明言しました。LTTEは、今まで「分離独立」を主張してきた訳ですから、今までの立場と随分違うのですね。

私は、「ということは、分離独立国家を目指すのではなく、自治権の強化を通じた問題解決をLTTEは目指したいという事なんですか？」と念を押したら、「そうだ」と、はっきり言うのです。

これは、非常に柔軟な考え方ですし、「これは脈がある」と私は直感しました。

そこで、私は準備してきた「英文の日本国憲法の第9条」を先方に渡して、説明しました。「これは日本国憲法の第9条です。日本は戦後、憲法において、国際紛争の解決の手段としての戦争を永久に放棄しました。そして、平和の道を選択して、戦争で荒廃した国家の再建に、経済発展を中心に専念して努力してきた結果、今の発展が得られました」 こういう話をしました。タミルチェルバン氏は、興味津々という顔で聞いていて、「日本の生き方に深い共感を覚えます。日本人が戦後、強固な意志とたゆまぬ努力で、見事に国家の再建を果たしたことに對して、深い敬意を抱いています。そのような日本から我々は支援を受けたい」と言いました。そこで私は、事前に日本政府としてスリランカ政府の了解を得ていたシナリオですが、LTTEの支配地域で、日本は、第一段階として生活飲料水の供給等の緊急・人道的援助をする用意があります。恒久的平和が実現すれば、第二段階として、インフラに対する復興支援も可能となるでしょう。そのためにも、是非早急に和平交渉を開始して頂きたいと言った話を致しました。先方の反応は大変ポジティブなものでした。

一時間半の会談後、別室での昼食会が始まりました。そろそろ、ジョークのひとつも出して笑いを誘う頃合いですね。私は靴の中から大野晋氏の『日本語の起源』という本を取り出して言いました。「この本は面白い本です。日本語の起源はタミル語であるという興味深い説が書いてあります」 私は、日本語とタミル語には似かよった語彙が多いこと、文法が似ていること、習

慣の共通点があることなどに触れ、「サンガムと言うタミルの詩歌は、日本の短歌の起源ではないかと大野氏は主張しています」と説明し、次の詩をタミル語で読み上げた。

Yanokkum kalai nilanokkum nokkakai 三二・四三(五・七で十二音節)

私が見る 時には 彼女は下を向く 見ない時は

Tanokki mella nakum 三・二・二(七音節)

彼女は(私を)見て 優しく 微笑む

通訳のジョージ氏は、正確な意味を英語でちどころに解説し、「ハイクに似ていますね」と言った。

「実はこの大野氏の説はとても危険な説なのです」

「どうしてですか？」と怪訝そうな顔のタミルチェルバン氏。

「何故かと言うと、日本語の起源がタミル語であるという説が本当に正しいとなるとですね、LTTEは、日本列島もLTTEの領土だと主張しかねませんからねえ」

突如、食卓にどっと笑いの渦が巻く。LTTEの幹部は、ユーモアのセンスがあるんですね。これは実に嬉しい発見でした。辞去する潮時になり、私はあらかじめ準備してきたタミル語で別れの挨拶を言いました。

「今日はお目にかかれて嬉しかった。会談も有益だったし、食事もルシー(美味)であった。今度は、私がコロンボで御礼に食事を差し上げる番です。私は、あと一年位はコロンボに勤務していると思います。ですから、それまでに、きっと紛争を解決していただきたい。交渉による恒久平和をスリランカにもたらしたい。そして、貴方が、自由にコロンボにやって来て、私と一緒に楽しく食事が出来る日が早く来ることを心から楽しみに待っています」

その場しのぎの外交辞令ではなく、私は真顔でそう言った。タミルチェルバン氏は、「有難う。その日が来ることを希望します」とこやかに微笑していました。

私はLTTEの本拠地キリノッチには合計8回行きました。

「LTTEの宿泊所に、今晚泊まっていきませんか？」と誘われたことがあります。本当は泊まりたくなかったのですが、折角のお誘いですから無碍に断ることも出来ず、ひと晩泊めてもらった事があります。

晩飯の際は、余興にジョークを交換したり、歌を歌ったりしました。

LTTEの宿泊所はひどい所でした。夜は、電気はカットです。部屋にシャワーはありますが、熱いお湯は勿論出ません。水です。ベッドは簡易ベッド、バンクベッドというんですかね、木枠の粗末なベッドがゴロンと置いてありまして、天井から蚊よけのモスクートネットが、ぶら下がっていました。蚊は遠慮せずにぶんぶん飛んできます。壁にはゴキブリ、床にもゴキブリがゾロゾロ…とにかくひどい所でした。で、夜、ベッドで寝ていますと夜中に、背中がもぞもぞと痒いんです。朝起きてみたら、やっぱり「ダニ」ですね。背中が真っ赤になってまして、痒くて痒くて…しょうがなかったですね。そういう所に泊めてもらって、LTTEの人達とお付き合いしながら、何とかこの和平プロセスを前に進めて行こうと必死で頑張っておりました。

この第一回会談から約40日後、実際にスリランカ政府とLTTEとの第一回目の和平交渉がタイで開始されました。私の働きかけがある程度効果があったのかもしれませんが、2003年3月には、日本政府主催で、箱根で和平交渉が開催され、それなりの進展もありました。

箱根での和平交渉にはスリランカ政府の関係者、LTTEの関係者もやってきて、4日間にわたって和平交渉をやりました。そのような和平交渉が、実際に箱根で行われていたということは、皆さん余りご存知ないのかも知れません。「それは知ってた」という人は、ちょっと手を挙げて頂けますか？全く手が挙がりませんね。それも不思議はないのです。何故かと言いますと、

和平交渉は3月20日に箱根のプリンスホテルで始まったのですが、その3月20日にアメリカの「イラク侵攻」という大事件が起こったのです。メディアは「イラク侵攻一色」の報道ぶりになりました。スリランカの和平交渉が箱根で行われているという事は、新聞には小さなベタ記事が載っただけです。ですから、皆さんが、そういう和平交渉を日本政府が主催して箱根でやっていたという事をご存知なくても、不思議ではありません。「アヒルの水かき」のような和平交渉は本来密かに行われるものかもしれません。

私の会談相手のタミルチェルバン政治部長も、LTTE代表団を率いて箱根にやって来ました。彼は私に、「ミスター・オオツカ、ひとつお願いがある。是非広島に行きたい。原爆で壊滅した広島が、その後どのように復興したのか、自分の目で是非見て勉強したい」と熱い眼差しで言うのです。私は彼の希望の通り、箱根での和平交渉が終わった後、広島への視察旅行を手配いたしました。同氏は、広島視察後、「自分の故郷のチャーワーカッチェリは、スリランカ政府軍の空爆で完全に破壊されてしまったが、広島の復興をこの目で見て、自分の故郷もこのように復興させなければいけないとつくづく思った」と潤んだ目で語っていたのがとても印象的です。

箱根での和平交渉は3月でしたけれども、6月には日本政府は「スリランカ復興開発に関する東京会議」を開催しました。これには、51カ国と22の国際機関の代表が参加して、総額45億ドルのスリランカ復興開発支援を約束しました。日本政府は、10億ドル拠出すると約束しました。これは、「和平の定着イニシアティブ」によるものです。ですから、スリランカのケースは、日本政府が当時展開した「和平の定着のためのイニシアティブ」の、最も良い例だったと私は思います。

このあたりまでは日本が描いていたシナリオは順調に進んでいたのです。しかし、その後、情勢は一変し、残念ながらスリランカは内戦に逆戻りするのです。2005年の総選挙で政権が交代、対LTTE強行派のラージャパクサ政権が登場、2008年1月には、スリランカ政府が停戦合意を破棄、政府軍はLTTE掃討作戦を強行し、2009年5月、LTTEを軍事的に壊滅させたのです。タミルチェルバンは、政府軍の空爆で死亡しました。LTTE最高指導者のプラバカランも殺害されました。

現在、スリランカには表面的には平和が到来したかのように見えます。自爆テロもありません。しかし、少数派のタミール人たちの不満は依然として根深く、多数派のシンハラ人との間の真の民族和解は、残念ながら未だほど遠い状況です。スリランカの和平プロセスに必死で取り組んでいた頃、トンネルの向こうに見えていた光—多くの人は「平和の光」だと思っていたのですが、振り返ってみれば、それは、「幻の平和の光」だったのです。

ユネスコ憲章の前文には「戦争は人の心の中で始まる。従って平和の砦は心の中に築かれなければならない」という言葉があります。理想の言葉としては美しい言葉です。しかし、私が民族紛争の現場で見たものは、もっともっと厳しい現実でした。

タンゴは結局のところ、二人で踊るものなのです。パートナーとの呼吸が合わなければ、ダンスは転んでしまうのです。紛争当事者自身が「その気」にならなければ、真の解決は困難です。これが、民族紛争の現場で得た私の実感です。

### (3) 社会福祉先進国スウェーデンの光と影

北欧に行ったことのある方手を挙げてください。スウェーデンに行ったことある方は？スウェーデン人というのは「ヨーロッパの日本人」と言われているくらいで、日本人と性格がとてもよく似ています。まず第一に「真面目」・・・そ真面目と言っても良いでしょう。時間厳守の几帳面な性格。初めのうちはなんてユーモアのない堅物ばかりだろうとがっかりしましたが、これが誤解でした。酒を飲むとがらっと性格が変わって愉快な人に変身するのです。この点も日本人とよく似ています。アクアビットというジャガイモで作った焼酎をぐびり、ぐびりとやるのです。45度くらいのきつい酒です。これは利きますよ。そして直ぐ歌が出始めます。これはシュナップスソングという愉快的酒飲みの歌です。ひとつご紹介しましょう。

(ソールンカーヴィをスウェーデン語で歌う)

これはカール・ミカエル・ベルマンというスウェーデンでは超有名な吟遊詩人の作った歌です。皆さんにはスウェーデン語ではちんぷんかんぷんでしょうから、今度は日本語の歌詞で歌います。この日本語の歌詞は、実は私がつくりました。

「さあ行こうよ、いつもの酒場、

ほらワイワイ、ガヤガヤやっている

あんたの人生、もうお終い、三途の川すぐそこさ

ほら、あんたの棺桶そこにある、大きな口開け待っている

そこで一杯、二杯に、まだ一杯、ほろ酔い気分で御昇天」(ベルマンのフリードマンズ・ソング21番)

スウェーデン人は長い夏休みをとります。1週間、2週間というような休暇ではありません。4週間の休みはざらです。6週間くらいの休暇をまとめて取る人も多いですね。

そこで、そういう国で仕事をしている日本の会社はどうなるかといいますと、夏の間は工場閉鎖ということもあります。スウェーデンには、スウェーデンハウスを製造して日本などに輸出している日本の会社があります。中部地方のダーラナ地方に工場があります。その工場は夏の間は、40日間工場閉鎖するそうです。日本では考えられないことですね。私はその工場を視察した時に工場長さんから聞いた話ですから本当の話です。

夏は、ポリス・ステーション、駐在所ですね。勿論、警察官も夏休みをとるわけですから、多くの地方の駐在所が臨時に閉鎖になります。情報公開の世の中ですから、新聞に何月何日からいついつまでどここのポリスステーションは閉鎖になり、どこそこが兼轄になります。こういう情報が堂々と新聞に載るのですね。これには私も驚きましたね。そんな情報を新聞に出したら、泥棒たちに「この辺は手薄だから泥棒するには狙い目だよ」とわざわざ教えているのと同じではありませんか。そういう話を私はスウェーデンの友人にいたしました。すると、友人はこう言うんですよ。「アンバサダー、心配しなさんな・・・泥棒たちも夏休みだから心配ないですよ」

刑務所に勤務する刑務官たちも当然夏休みを取るわけですね。すると、夏の間は脱獄が多くなるのです。スウェーデンの脱獄人の数は1993年には年に128人でした。これは3日に一人脱獄している計算になります。これはいけないというのでだいぶ改善されたようです。10年後の2003年には39人になったそうです。ちなみに、日本の場合は平成16年は脱獄は3人だったそうです。

社会福祉の先進国としてのスウェーデンについて少しお話ししたいと思います。スウェーデンに3年半住んでみて感じたことは、なるほど「ゆりかごから墓場まで」といわれる社会福祉の先進国だなという実感はありました。

#### スウェーデンの質の高い福祉政策

日本でも最近、社会福祉と税の一体改革について大分議論が進み、ようやく民主、自民、公明の三党合意が成立し、消費税率を2014年4月に8%、2015年10月に10%への引き上げを柱とした一体改革関連法案が6月に衆議院を通過しました。大変遅まきながら、ひとまず一歩前進と評価して良いでしょう。小生はゆくゆくは消費税は15%くらいまでは上げる必要があると思っておりますが、皆さんはどうお考えでしょうか。

ところで、スウェーデンは高福祉高負担の国といわれています。日本は逆に低福祉低負担の国ですね。これを具体的な数字でお話ししましょう。

税金と社会福祉保険料の合計額とその国のGDPを比較した数字が決め手です。スウェーデンは世界最高レベルで約50%です。他の北欧の国、ノルウェーやフィンランドでも事情は大体同じです。日本はスウェーデンの約半分の26%です。それだけ国民が高い福祉のために税金を納めているわけですから、質の高い福祉を受けられて当然な訳ですね。

スウェーデンの「高負担」の大きな要因は、25%という世界最高レベルの消費税です。日本の消費税5%は、スウェーデンの5分の一と極めて低い。もっともスウェーデンの消費税25%は一朝一夕に実現されたものではありません。

高福祉高負担の統計的実態は、既に周知の事実になっていますので、ここではこれ以上詳しくは申し上げませんが、「高負担を支えるスウェーデンから日本は何を学び得るか？」に光を当てるのが参考になると思います。私の観察では、コンセンサス方式という手法、先を見据えた段階的取り組み方、そして国民と政府との信頼関係の三点が日本として学び得る「スウェーデンらしさ」だと思いますね。

第一の「コンセンサス方式という手法」。この好例として、1990年代に実施された年金改革への取り組みを挙げることが出来ます。1991年、年金制度の改革という国民的重要課題に取り組むために、与野党が立場を超えて、全7政党の参加の下で「超党派委員会」を設立し、約3年かけて徹底的に議論の上、与野党合意のガイドラインを作り上げました。94年の総選挙により、穏健党政権から社民党政権への政権交代があったにもかかわらず、このガイドラインは基本的に引き継がれ、98年には国会

で法案として議決されるに至りました。7年がかりの取り組みの成果であった訳ですが、最大のポイントは、超党派の委員会を設け、じっくり時間をかけて徹底的に議論し、「政治的コンセンサス」を形成するという粘り強い取り組みです。

ひるがえって、今の日本の取り組みはどうか？高齢化社会の社会福祉制度の将来像こそは、日本でも超党派で取り組んで貰うべき最重要課題です。民主党も自民党も目先の党利党略を捨てて、超党派による取り組みでコンセンサスを作り上げて貰いたい。これを実行するのが真の政治と言うものでしょう。最近、ようやくこれに向けて一歩前進という動きが出てきていますが、もっと強力に迅速に超党派の取り組みを推し進めて貰いたいものです。

第二は、「先を見据えた段階的取り組み」です。スウェーデンの25%という世界最高レベルの消費税は、勿論、一朝一夕に出来た訳ではありません。52年前の1960年に、最初に付加価値税として導入された時は、4.2%でした。それを8回にわたり、段階的にじわじわと上げて、40年かけて1990年に25%（ただし食料品は12%、書籍は6%）まで上げてきている。（62年6.4%、66年10%、68年11.11%、70年16.28%、71年17.65%、77年20.63%、80年23.46%、90年25%）1990年以来、25%の数字はずっと20年間据え置きのままです。私は、25%はもう限界で、国民の税負担からすれば、これ以上の引き上げはないであろうと見ています。

税収が新規国債発行額を下回るというような異常事態、将来不安が山積みの社会保障の現状を見れば、消費税引き上げの「段階的取り組み」についての国民的コンセンサス作りを「政治主導」で進めて貰いたいものです。私は当面は10%への引き上げ、ゆくゆくは15%程度までの引き上げが必要だと思います。引き上げの目的は、年金、医療、介護などの社会保障費を賄う「社会福祉目的税」という形とすることが最も説得力があるでしょう。

第三は、社会福祉を巡る国民と政府の信頼関係です。スウェーデンでは、高負担にも拘わらず、社会福祉を巡る国民と政府の間に確固たる信頼関係が存在するということが大きな特徴と言えます。スウェーデン人に、「高い税負担をどう思うか？」と質問すると、「もちろん高いけれど、それに見合う福祉サービスを受けているから不満はない」という答えが異口同音に返ってきます。ここが日本と決定的に違うところです。日本では、年金という国民生活の根幹にかかわる重要な仕事を担当する「社会保険庁」の杜撰極まる仕事ぶりを目の当たりにした国民の怒りと不信は深いですね。「信頼関係の構築」は至難の業ですが、政府は、誠心誠意取り組み、粘り強く国民の信頼回復に精力を傾注すべきだと思います。

#### (4) 修羅場のユーモアを教えてくれたスコットランドの友人

最後に、「修羅場のユーモア」を私に教えてくれたスコットランドの友人のことをお話ししたいと思います。私はスコットランドのエジンバラで、初代の総領事をしておりました時に、イギリス人、正確には、スコットランド人の戦争捕虜の人とお近づきになりました。その人は、ジェームズ・ラッセルさんという、当時72歳の方でした。私が赴任して一年ぐらい経った時に、イギリスのBBCテレビが、太平洋戦争中に日本軍が作った「泰緬鉄道」についての特集を放映いたしました。泰緬鉄道については、皆さんご存知だと思います。日本軍の鉄道隊によるこの鉄道建設では、連合軍側の捕虜の中から大変多くの死者が出たものですから、今でも「死の鉄道」と呼ばれて非難されております。その生々しい特集番組がテレビで放映された訳です。次の日に総領事館に電話がかかってきました。

「私は、ジェームズ・ラッセルだ。あの鉄道建設に従事させられた戦争捕虜の一人なんだ」

私は、「いよいよ来たな」と観念しまして、まずは、聞き役に廻りました。ラッセルさんは言いました。

「あの戦争が終わって以来、わしは日本人と会った事がない。話をした事もない。正確に言えば、もう日本人には二度と会いたくないと思っていた。しかし、最近どうもエジンバラに日本の総領事館が新しく開設されたと聞いた。それで昨日のタイムズ鉄道のテレビ番組見て、こりゃ一度、自分の気持ちを日本人に是非聞いてもらいたい、という事で今日電話したんだ」

それから、延々一時間、電話でやりとりをしました。

「あんたは戦争の事を覚えてるかね？」とラッセルさんに聞かれました。私は昭和17年の生まれの戦中派なんですが、幼い頃の記憶を辿って話をしました。「1942年の4月に東京で生まれました。戦争が激しくなり、東京空襲が始まっても家族はずっと終戦まで荻窪に住んでいました。B29による焼夷弾爆撃とか、防空壕の中でロウソクの薄明かりの下で食べた雑炊なんかをよく覚えています。母は、戦争中に結核になって帰ってきた父を看病しているうちに、自分が結核になって、当時は十分な薬もなく、1944年の2月に母は死にました。私は1歳9か月でした…」というような事を記憶を辿ってぼそぼそと話しました。かれこれ1時間ぐらいの話の一番最後にラッセルさんが、「あんた、日本人の割には悪いやつじゃなさそうだな」(For a Japanese, you are



not a bad chap)と言うんですね。「一度、私の家にお茶でも飲みに来ないかね？」こういうお誘いでした。「はあ、ありがとうございます」とりあえず私は電話口で言いました。私はずっとメモを取りながら話をしていましたので、ぐったり疲れましてね、それで、さようならという事になった訳です。それからしばらくして、本省から「バンコックの大使館に公使として転勤しろ」と言う話しになったものですから、ラッセルさんの事がどうしても気になりまして、エジンバラを発つ一寸前に自分で決心して、ラッセルさんの家を訪ねる事にしましたのです。

お会いした時、ラッセルさんは緊張のせいか、目の辺りがピクピク痙攣していました。居間のソファーに座ってラッセルさんの当時の捕虜生活の話がポツポツと始まりました。「捕虜収容所では、日本人の兵隊の中には、ビンタばかりを食らわせる、嫌なやつが多かったけども、イトウと言う名前の兵隊はカトリック教徒で、なかなか良い人で、人間味のある親切な人だった」とも言っていました。

「あんた、『戦場に架ける橋』という映画を見たことあるか？」そう質問されて、私が「見たことがあります。あれは素晴らしい映画でした」と答えると、ラッセル氏は「あんなデタラメな映画はないね。あんな丸々太った捕虜なんて、どこにもいないよ」と言いました。それにつられて皆でアハハハと笑いました。話が始まってからの初めての笑いでした。ラッセルさんの話の中に、ある日、大きな木を倒す作業を捕虜達がやらされたと言う話がありました。どういう作業であったかいうと、木の四方に縄を張りまして、それぞれの縄を皆で持って、こっちに引いたり、向こうに引いたりして、木を倒す作業です。その時、皆で、日本語の掛け声でやったのだそうです。収容所で日本語の勉強もさせられたらしいのです。「イーチ ニー サーン、イーチ ニー サーン」という具合のかけ声でやったと言うのです。ところがその後が面白いのです。「我々は、単に日本語でイーチ ニー サーンだけではどうも腹の虫が収まらない。そこで、その後にこっそりちょっと付け加えた秘密の掛け声があった。「トージョー、ザ・バスタード」という秘密の掛け声を・・・」。「イーチ ニー サーン、トージョーのバカ野郎！」という意味ですね。捕虜達は腹いせで、そんな掛け声を出しながら木を倒す作業をやっていたというのです。そういう次第で、木を倒す作業は無事終了したけれども、結局あとで日本の兵隊に秘密の掛け声の意味がばれてしまって・・・それでまた皆日本の兵隊からひどいビンタをくらったと言う話でした。こういう「修羅場のユーモア」の話はラッセルさんから聞いて私は胸を打たれましたね。二時間くらい色々お話を聞いてお茶を飲んだりして、そろそろお別れの時になりました。そこで私は、習い覚えたバグパイプで「アメーシング・グレイス」を吹きまして、ラッセルさんはとても喜んでくれました。ラッセルさんの家を思い切って訪ねて本当に良かったと思いました。

バンコックに行ってから暫くして、まさにその「泰緬鉄道」に乗る機会がありました。タイ側のカンチャナブリからナムトクまでは、今でもタイ国鉄で約130キロの線路が残っていて鉄道が走っています。私は泰緬鉄道に乗った感想をバンコックからラッセルさんに手紙を書いて送りました。するとラッセルさんから返事がきました。「タイでの初めてのキャンプは、ハッポンだったけれども、カンチャナブリに回された時は、大昔にマルコポーロがカンチャナブリに来たことがあると聞かされて、大変面白いと思った記憶がある」と書いてありました。更にその手紙には「ところで神戸で大地震があったようで、大変大きな被害が出たようだけれども、私のお見舞いの気持ちをここに記しておきたい」と書いてありました。

その次の手紙も来ました。「あなたが、まだバグパイプの練習を続けているようで、大変嬉しい。私は実は大腸癌に罹って、先が長くないかもしれない。もっといろいろ手紙に書きたい事もあるのだが、手に力が入らなくなってきた」と書いてありました。その次に来た手紙は、ラッセルさんからの手紙ではなく、ラッセルさんの長男のユウエン・ラッセルさんからの手紙でした。それは哀しい知らせの手紙でした。その手紙には「父は先日大腸癌で死にました。生前の父と貴方の交友を心から感謝しております。父が死ぬ一週間ほど前、父は「あのバグパイプを吹いてくれたミスター・オオツカは、バンコックで元気になっているかな？」と、懐かしそうに語っておりました。戦後の五十年、父の心に残された戦争の傷跡は、大きく深いものがありました。しかし、父は貴方との交流を通じて、自分の気持ちを整理する事が出来たのではないかと思います。父を訪ねていただいて、本当に有り難うございました」 こういう内容の手紙でした。「修羅場のユーモア」というものを教えていただいたスコットランドの友人、ジェームズ・ラッセルさんのお話です。

ところで、第二次世界大戦中のポーランドのアウシュヴィッツ収容所での悲惨な暮らしの中で「ユーモア」を忘れずに実践した一人のユダヤ人がいました。驚くべきことです。

その人は、心理学者のヴィクトール・フランクルという名前のユダヤ人です。アウシュヴィッツ収容所から奇跡の生還を果たした後、フランクルは「夜と霧」という題の本を書き、その中でアウシュヴィッツ収容所での自分の体験を生々しい言葉で書いています。フランクルはある日、建設現場で働く仲間に提案します。「毎日、義務として最低ひとつは笑い話をつくって皆で交換しようじゃないか」

栄養失調でがりがりに骸骨のように痩せこけた収容所の人達が、明日は「ガス室送り」かもしれないとの恐怖に怯えながらも、ジョークをつくって笑おうとしているのです。

フランクは本の中に書いています。「ユーモアは自分を見失わないための魂の武器である」フランクの言葉がずしんと胸に響きます。高杉晋作は辞世の句で、「面白きこともなき世を面白くすみなすものは心なりけり」と詠みました。ここにいう「心」とは「ユーモアの心」のことではないでしょうか。

皆さんも、これからの日々の暮らしの中で、ユーモアを実践されては如何でしょうか。友達の輪が広がります。笑いは健康にも良いです。きっと心豊かで面白い人生が開けることでしょう。

ご清聴頂きまして、本当に有り難うございました。最後にバグパイプで「アメージング・グレイス」を吹かせて頂きます。

.....

当日の会場は定員 60 名を超える参加者が集まり、大塚大使が“Icebreaker”として投げかた自称「駄洒落」に爆笑に次ぐ爆笑が湧き起こりました。一方、スリランカの話では、「タミールの虎」のリーダーを相手に、命がけで和平交渉に当たられた大使の熱意と胆力に感心し、また、スコットランドの話では、第二次大戦中に日本軍の捕虜となり泰緬鉄道建設の過酷な重労働に従事させられたラッセル氏との、恩讐を超えた心と心の通い合いを体験されたエピソードを伺い胸がジーンとなりました。

そして、最後は、お待ちかねのバグパイプの演奏。昨秋も演奏して下さった勇壮な「Scotland the Brave」と「アメージンググレース」に加え、日本の曲(赤とんぼ、浜千鳥)まで演奏して、参加者全員を魅了して下さいました。参加者の皆さんから回収したアンケートからも、今回の講演が大好評であったことが裏付けられました。

(広報ブレティン・インターネット委員会担当副会長 棚橋征一)